

英語の再帰代名詞に関する通時的考察

轟 里香

A Diachronic Study of English Reflexives

Rika Todoroki

北 陸 大 学 紀 要
第41号(2016年9月)抜刷

英語の再帰代名詞に関する通時的考察

轟 里香*

A Diachronic Study of English Reflexives

Rika Todoroki*

Received May 31, 2016

Abstract

The purpose of this article is to examine constraints on reflexive anaphora in English and show that they have relation to the history of reflexives.

There have been various studies on English reflexives to produce a fully general theory of anaphora. For instance, the syntactic approach embodied in the Chomskyan binding theory is quite well known. From the functionalist perspective, Kuno (1987) has devised another insightful approach, mirrored in the work of Hintikka and Sandu (1991). However, none of them can explain all examples including reflexives. Taken alone, neither syntactic approaches such as the Chomskyan binding theory nor functional approaches like Kuno are up to the task of providing a fully adequate description of the distribution of reflexives in present-day English.

Some researchers, Reinhart and Reuland (1993), for example, try to divide reflexives into two groups in order to deal with problematic cases for syntactic constraints. These approaches are not able to handle all of the observable data, though.

I maintain (Todoroki 1993) that the grammar of English employs a variety of different sorts of mechanisms to constrain the use of reflexives. Furthermore, I claim (Todoroki 1994) that it is inadequate to divide reflexives into two groups clearly, and propose a hierarchy of argumenthood of reflexives concerning the interaction between syntactic and functional constraints on reflexives.

This article shows how syntactic and functional constraints on English reflexives interact according to the hierarchy, and tries to relate this discussion to the historical development of English reflexives by referring to Keenan (2002).

1. 導入

本論文は、現代の英語の再帰代名詞に課される制約の歴史的背景を探ることを目的とする。

英語の再帰代名詞の分布に関しては、様々なアプローチが行われてきた。統語論的な制約は、再帰代名詞を含む文の多くを説明するが、これに従わないように見える例もある。このため、様々な意味的・機能的説明が試みられてきた。しかし、どのような制約も、単一では反例があ

*未来創造学部 School of Future Learning

り、あらゆる例を統一的に説明するのは困難である。

轟 (1993, 1994, 1996)、Todoroki (1995) は、再帰代名詞を含む例文を分析し、様々な制約間の相互作用を考察した。これらの議論に基づき、本論文では、再帰代名詞に対して課される制約が単一でないのはなぜなのかを、歴史的な観点から考察する。

本論文の構成は次のようなものである。2 節では、統語的説明のみでは扱えない例があることを指摘し、それらの間の共通点を探る。3 節では、Kuno (1987) が提案している機能的制約を挙げ、その問題点を考える。4 節では、再帰代名詞の出現する統語的位置が、再帰代名詞に対する制約に関わっていることを指摘する。5 節では、英語の再帰代名詞の通時的な研究である Keenan (2002) を取り上げ、本論文での主張には歴史的な観点からも根拠があることを見る。6 節では、本論文の議論のまとめを行う。

2. 束縛原理の問題点

2.1 束縛原理の定義

再帰代名詞に関する統語論的分析の代表的なものとして、Chomsky (1986b) で提案された束縛理論がある。束縛理論において、音形を持つ NP は三つのグループに分けられている。それらは、照応形、代名詞、指示表現である。これらの分布を規定する束縛原理は、Chomsky (1981, 1986b) によれば、次のようなものである。

(1) 束縛原理

- (A) 照応形は、ある局所的領域の中で束縛されていなければならない。
- (B) 代名詞は、ある局所的領域の中で自由でなければならない。
- (C) 指示表現は、自由でなければならない。

再帰代名詞は、このうちの照応形のグループに含まれる。すなわち、その分布は、束縛原理の A によって規定されることになる。

ここで、束縛原理に関係する幾つかの用語の定義を見ておく。(1) における「ある局所的領域」とは、Chomsky によれば、最小の完全機能複合 (CFC) をなす範疇である。すなわち、その範疇の主要部の特性と合致するすべての文法機能 (具体的には、主語と補部) が具体化されている最小の範疇である。この定義によれば、束縛原理における局所的領域とは、ほとんどの場合、IP か、主語を持つ NP ということになる。

次に、「束縛」の定義は、Chomsky (1981) によれば、以下のようなものである。

- (2) α が β を c 統御し、 α と β が同一指標を持つときそしてそのときに限り、 α は β を束縛する。

(2) において、 β と同一指標を持ち β を c 統御する α は、 β の「先行詞」である。束縛されていない NP は「自由である」ということになる。

(2) を理解するには、さらに、「c 統御」に関する定義が必要となる。Chomsky (1986a) によれば、c 統御は次のように定義される。

- (3) α も β もどちらも相手を支配せず、 α を支配する節点のすべてが β をも支配するときそ

してその時に限り、 α は β を c 統御する。

以上の定義から、束縛原理が再帰代名詞を含む例の適格性をどのように説明するか見てみよう。束縛原理は、再帰代名詞が、最小の完全機能複合 (CFC) 中で同一指標を持つ先行詞を持つことを要求する。このことは、次のような例によって示される。

- (4) a. [IP John_i likes himself]
b. *[IP John_i thinks that [IP Mary likes himself]]

(Todoroki 1995:127)

(4a) において、再帰代名詞を含む最小の CFC は、文全体である。その中で、再帰代名詞は同一指標を持つ先行詞により c 統御されているため、(4a) は適格である。一方、(4b) においては、再帰代名詞を含む最小の CFC の中に、同一指標をもつ先行詞が存在せず、(4b) は不適格となる。

さらに、次の例を見てみよう。

- (5) a. He_i hates himself.
b. *His_i brother hates himself.

(ibid., 128)

束縛原理によれば、再帰代名詞は同一指標を持つ先行詞により、 c 統御されなければならない。

(5a) においては、再帰代名詞は最小の CFC の中で c 統御されている。一方、(5b) では、再帰代名詞と同一指標を持つ先行詞が NP のなかに含まれており、再帰代名詞を c 統御することができない。このため、(5b) は不適格となる。

また、束縛原理の規定によれば、再帰代名詞と代名詞は、相補分布を成すことになる。これらは、次のような例によって示される。(中村、他 1989)

- (6) a. Tom_i thinks John admires him_i.
b. Tom thinks John_i admires himself.
c. *Tom_i thinks John admires himself.
d. *Tom thinks John_i admires him_i.

(6) が示すように、再帰代名詞が適格な例において再帰代名詞を代名詞に替えると、不適格となり ((6b) と (6d))、代名詞が適格な例において代名詞を再帰代名詞に替えると、不適格となる ((6a) と (6c))。このように、再帰代名詞と代名詞が相補分布を成すことを、束縛原理は予測する。

2.2 束縛原理の問題点

束縛原理は多くの例の適格性に関し正しい予測を行うが、これに従わないように見える文がある。

- (7) Between ourselves, Watson, it's a sporting duel between this fellow Milverton and me.
(Conan Doyle 1986)

(8) How do you think [ɪt went for yourself] ?

(In a conversation, M.T. Wescoat, Personal Communication, 轟 1993:94)

(9) (cf. (5b)) He finds equally “remarkable that their_i critical diagnosis and prognosis should have so much in common among themselves_i, and with the critics of the twentieth century.”

(Brown Corpus)

(10) (cf. (6))

a. John_i put the blanket under himself.

b. John_i put the blanket under him_i.

(Kuno 1987:66)

(7) (8) が示すように、一人称・二人称の再帰代名詞は、最小の完全機能複合 (CFC) 中に同一指標を持つ先行詞がなくても容認される場合がしばしばある。(9) は、(5b) と同様に、先行詞が所有格形で NP の中に含まれているため、同一指標を持つ再帰代名詞を c 統御しない。また、代名詞と再帰代名詞が相補分布を成さない例もある。(10) では、動詞 “put” により選択される PP の中に再帰代名詞と代名詞の両方が現われている。Kuno (1987)、Hintikka and Sandu (1991) によれば、このような例において、再帰代名詞を使うか代名詞を使うかによって意味的な違いが生じる。再帰代名詞を用いた (10a) は毛布と John との身体的接触を含意するのに対し、同じ位置で代名詞が使われている (10b) においてはそのような含意はない。すなわち、John が椅子に座っていて毛布が椅子の下にあるというような状況でもよい。

3. Kuno (1987) の分析

再帰代名詞の機能的な研究として、Kuno (1987) がある。Kuno は、英語の再帰代名詞の分布を決定する制約として、次のようなものを挙げている。

(11) 再帰代名詞は empathy 表現であり、その先行詞は empathy の焦点になりやすいものでなければならない。

(12) 英語の再帰代名詞の指示物は、その文が表す行為あるいは心的状態の直接の受容者もしくは標的でなければならない。

(11) の制約が、先に挙げた例にどのように当てはまるか見てみよう。

(13) (= (5b)) *His_i brother hates himself.

(14) (= (9)) He finds equally “remarkable that their_i critical diagnosis and prognosis should have so much in common among themselves_i, and with the critics of the twentieth century.”

(13) の “his brother” という NP は empathy の焦点になり得る。これに対し、(14) の “their critical diagnosis and prognosis” という NP は inanimate であり、empathy の焦点にはなり得ない。したがって、Kuno の考え方によれば、empathy の焦点になり得る “their” が先行詞となるということになる。

(12) の制約は、(10) のような例にみられる現象を説明するために設けられたものである。上に述べたように、Kuno によれば、再帰代名詞を用いた (10a) は毛布と John との身体的接

触を含意する。(12)によれば、再帰代名詞の指示物である John が「毛布をその下におく」という行為の直接の標的となるため、John と毛布の物理的接触が含意されるということになる。

(12) は (10) のような現象を説明するために設けられたものであり、Kuno によれば (11) の制約とは関連がない。

Kuno の分析は、再帰代名詞の持つ機能的側面を的確にとらえているが、問題は残る。一つの点として、(11) だけでは次のような文が不適格であることを説明できない。

(15) * His_i ambition hurt himself. (cf. (9))

(15) における “his ambition” は、(14) の “their critical diagnosis and prognosis” と同様に inanimate であり empathy の焦点になれない。したがって、(11) によれば ((14) の場合と同じように) (15) でも empathy の焦点になり得る “his” が先行詞となるということになる。しかし、実際は、そのような同一指示関係は不適格となる。

4. 再帰代名詞の現れる統語的位置

以下の例が示すように、再帰代名詞が現れている統語的位置は、再帰代名詞の制約に影響を及ぼす。

(16) a. (= (13)) *His_i brother hates himself.

b. (= (15)) * His_i ambition hurt himself. (cf. (9))

(17) (= (14)) He finds equally “remarkable that their_i critical diagnosis and prognosis should have so much in common among themselves_i, and with the critics of the twentieth century.”

(16a,b) においては、再帰代名詞は動詞の直接目的語の位置に現れている。この場合、empathy の焦点になりやすいかどうかに関わりなく、再帰代名詞を c 統御しない先行詞は容認されないことが分かる。これに対し、(17) のように、再帰代名詞が直接目的語でない場合は、再帰代名詞を c 統御しない先行詞が容認される場合がある。

このような違いを、再帰代名詞が項であるかどうかという違いとして捉えているのが、Pollard and Sag (1992) や Reinhart and Reuland (1993) などである。Pollard and Sag は先行詞の coargument である再帰代名詞のみが束縛原理 A に従うとしている。これによれば、項の位置にある再帰代名詞が束縛原理 A に従うということになる。動詞の直接目的語は明らかに、項である。したがって、束縛原理 A に従うことになる。

Reinhart and Reuland は、再帰代名詞を項の位置に生じるものと非項の位置に生じるものとに二分し、項の位置に生じるもののみ彼らの統語的制約の対象としている¹。

しかし、再帰代名詞の生じる位置を完全に二分化することには問題がある。轟 (1994) が指摘するように、次のような例が存在する。

(18) Sailors admire him, not only for exploring the rugged coast of New England without serious mishap, but for his *Treatise on Seamanship* in which his_i description of the “The Good Captain” well applies to himself_i :

(Morison 1965:98, 轟 1994:22)

(19) Other fur traders_i in the meantime brought pressure on the king_j [PRO_j to cancel the monopoly and give it to themselves_i];

(ibid., 轟 1994:22)

(18) (19) において、再帰代名詞は項の位置に生じており、Reinhart and Reuland の考え方では、統語的制約の対象となるため、(18) (19) が非文法的であると誤って予測してしまう。

ここまでの議論をまとめると、以下のようなになる。再帰代名詞に対する制約を考える場合は、再帰代名詞が現れる位置が項の位置かどうかが重要となる。束縛原理のような統語的制約は項の位置に現れる再帰代名詞に対して働くのに対し、Kuno (1987) が提案するような機能的制約は、非項の位置に現れる再帰代名詞に働くと考えられる。しかし、再帰代名詞の現れる位置を項と非項に二分化することには問題がある。

このような問題を解決するため、轟 (1994) は以下のような提案をした。項か非項かを二分する代わりに、項性には連続性があり、その変化に応じて統語的制約の働く強さが変わると考える。

- (20) a. Max criticized Mary.
b. I talked to Mary.
c. I put the blanket under the chair.
d. John hid the book behind the bookshelf.
e. Dick himself wants to become a teacher.

(轟 1994:23)

(20) において、下線部の NP の項性は、a から b にいくにしたがって下がっていくと考え、次のようなスケールを仮定する²。

(21) Object of V > Argument PP > Adjunct PP > Appositive NP

(轟 1993:98)

(21) のスケールの左端の位置では、再帰代名詞の文法性は統語的制約のみによって決定されるが、スケールを右にいくほどその影響は小さくなり、右端で最小となる。統語的制約の影響が小さくなるにつれて、機能的制約の影響が大きくなり、スケールの右端では、機能的制約が再帰代名詞の文法性を決定するようになる。すなわち、統語的制約と機能的制約は相補的な形で働くが、それらの制約の対象は完全に二分化されるものではなく、その境界は連続的であるといえる。

実際の例では、動詞の直接目的語の位置に現れる再帰代名詞はほぼ例外なく統語的制約に従うのに対し³、前置詞句中に現れる再帰代名詞は事情が異なる。前置詞句中に現れる再帰代名詞には、統語的制約の反例となる例が出現する。項性に連続性を仮定する考え方により、このような例の出現を正しく予測することができる⁴。

また、上のような考え方は、再帰代名詞の歴史的発展からも支持される。この点を次節で見る。

5. 再帰代名詞の制約に関する通時的考察

通時的に見ると、再帰代名詞の用法は、人称代名詞の対照的なものとしての用法が始まりで

ある。それが、次第に、再帰的な用法を持つようになった。

この節では、Keenan (2002) に基づき、このような再帰代名詞の発展の歴史を概観する。そして、それが本論文の議論を支持するものであることを示す。

5.1 古英語における名詞句の同一指示関係

先に述べたように、現代英語では、動詞の直接目的語の位置で主語と同一指示関係となる名詞句は再帰代名詞でなければならない。これに対し、古英語ではそのような位置に代名詞を用いる。

- (22) þa gegyrede heo hy mid hœrenre tunecan ond ...
then dressed she; her; (acc) in a tunic of hair and ...

(Keenan 2002:331)

古英語における **self** は、形態的には形容詞として屈折した。統語的には独立した語であり、固有名詞、代名詞、冠詞＋名詞などを修飾した。通常は、それらの名詞句の直後に置かれた。また、それらの名詞句と性・数・格において一致した。(それらの名詞句を、「**self** の先行詞」と呼ぶことにする。)

意味的には、**self** は「**self** の先行詞」の指示物を対照的に際立たせる働きをした。古英語期の初期においては、その対象は身分の高い存在であり、特に神や王などに関する表現で用いられた。

現代英語の再帰代名詞に形態的には近い「代名詞＋**self**」も、古英語期には局所的な先行詞を要求しなかった。

- (23) þa forborn þæs cyninges heall ... ond his sunu awedde, ond he sylf ahreofode, ...
then the king's hall burnt down ... his son went mad, and he self became a leper

(ibid., 336)

(23) において、「代名詞＋**self**」(“**he sylf**”) の先行詞は、同一文中には存在しない。

5.2 再帰代名詞の成立とその用法の変化

代名詞と **self** が音韻的に一語となった再帰代名詞は、中英語期の 1200 年代に生じるようになった。これは、**self** の元来の用法を受け継ぎ、常に対照的な意味で用いられた。一方、動詞の直接目的語の位置で主語と同一指示関係となるという用法(再帰的用法)をもつ名詞代用表現としては、古英語期と同様、代名詞が用いられた。

- (24) Ne mei nan mon habben al his wil, and blissien him mid þisse worlde
No man may have all his will and rejoice himself with this world

(ibid., 345)

1500 年代には、再帰代名詞が斜格の項である場合、対照的な解釈が義務的ではなくなった。1600 年までには、現代英語とほぼ同じ再帰代名詞の用法が成立した。すなわち、この時期に、

動詞の直接目的語の位置で主語と同一指示関係となる名詞句としての再帰代名詞の用法が確立した。Keenanによれば、動詞の直接目的語としての再帰代名詞の例として集められたもののうち、同じ動詞の主語と同一指示関係となるという用法を持つ再帰代名詞の割合は、古英語および中英語においては約20%であったが、1500年代には80%以上となっている。

直接目的語としての再帰代名詞が、対照的な用法ではなく再帰的用法として用いられると、代名詞と同義ということになり、代名詞との差異がなくなる。このことにより、直接目的語の位置で再帰的な用法を持つ代名詞は駆逐され、主語と同一指示となるNPは再帰代名詞のみとなったとKeenanは述べている。

5.3 現代英語における再帰代名詞の用法に対する制約

現代英語において、再帰代名詞の典型的用法と言えるのは、次の二つであろう。

(25) He_i himself_i seems to be tough, tireless, able, and intelligent, more intellectual and self-critical than most soldiers.

(Brown Corpus、轟 1993:96)

(26) She_i told, herself_i rebelliously, and with pride, "I am an American."

(ibid., 96)

(25)では、指示物がその人であって他の人ではないということを強制的に示すために再帰代名詞が用いられている。つまり、この用法の再帰代名詞は、指示物以外の存在を前提し、それに対して指示物を対照的に際立たせる役割を果たしている。すなわち、対照的な用法であると言える⁵。これに対し、(26)では同じ動詞の主語と直接目的語が同一指示であることを示すために再帰代名詞が用いられている。これは、再帰代名詞の再帰的用法である。轟(1993)によれば、これら二つの用法が、Brown Corpus中の再帰代名詞を含む例の大半を占めている。

再帰的用法を持つ再帰代名詞は、典型的には動詞の直接目的語位置に現れ、束縛原理などの統語的制約の対象となる。一方、同格名詞の位置に現れる再帰代名詞は、対照的な用法を持つ再帰代名詞である。このような再帰代名詞が、Kuno(1987)が提案するような機能的制約の対象となると考えられる⁶。

では、(25)(26)以外の位置に現れる再帰代名詞についてはどうであろうか？先に述べたように、動詞の目的語位置以外に出現する再帰代名詞には、束縛原理などの統語的制約の反例が存在する。このことは、動詞の目的語位置と同格名詞を両端とする項性のスケールを仮定することによって説明することができる。項の位置、特に直接目的語の位置では、再帰代名詞は再帰的用法のみを持つため、代名詞と相補分布を成すことになる。しかし、項性が下がるにつれ、対照的な意味合いが出てくる。それとともに、代名詞との差異も生じることになり、両方の出現が予測される。実際の例は、このことを示している。

この節で考慮したように、再帰代名詞の用法は、人称代名詞の対照的なものとしての用法から始まり、次第に、動詞の目的語位置で再帰的な用法を持つようになった。すなわち、(21)の項性のスケールに伴い、再帰的用法に対する制約と対照的な用法に対する制約の間に相互作用の関係があるという考え方には、歴史的に見ても根拠があると言える。

6. 結論

本論文では、現代の英語の再帰代名詞に対する様々な制約を考察し、それらの背後には歴史的な背景があることを指摘した。

再帰代名詞を含む文には、複雑な現象がある。そのため、再帰代名詞の分布に関するアプローチには、束縛原理を初め様々なものがある。しかし、本論文で示したように、どれも単一では再帰代名詞の分布を説明することは困難である。再帰代名詞に対する制約の働き方には、再帰代名詞が出現する統語的位置（すなわち項であるかどうか）が非常に重要である。しかも、轟（1994）が指摘するように、項・非項を完全に二分化すると問題が生じる。その境界が連続的であると仮定すると、多くの問題を解決することができる。

再帰代名詞の制約にこのような条件があるのには、再帰代名詞の歴史的発展の仕方が大きく関わっている。再帰代名詞は人称代名詞の対照的なものとしての用法が始まりであり、次第に、再帰的な用法を持つようになった。直接目的語の位置では、対照的な用法ではなく再帰的な用法をもつものとして用いられ、その位置でそれまで再帰的な用法をもっていた人称代名詞を同義であるものとして駆逐した。このような位置では、再帰代名詞は局所的な先行詞を必要とし、束縛原理のような統語的制約に従うことになる。一方、対照的な用法が残る位置では、機能的制約の対象となる。このように、本論文では、再帰代名詞の分布を規定する条件を考察する際に、歴史的な発展を考慮することが不可欠であることを示した。

註

¹ 詳しい議論は、Reinhart and Reuland（1993）を参照。

² 轟（1994）は、(21) のスケールをさらに細かく分けているが、ここでは、本論文での議論に十分な轟（1993）のスケールを用いた。このようなスケールを考える根拠に関する詳しい議論については、轟（1994）を参照されたい。

³ 次の例のような二重目的語構文に出現する再帰代名詞は、統語的制約にとって問題となる。

- (i) a. I showed John_i himself_i (in the mirror).
b. *I showed himself_i John_i (in the mirror).

(Todoroki 1995:129)

Todoroki（1995）は、(i) のような例を含む、項の位置の再帰代名詞で統語的制約に対する反例となるものを取り上げ、統語的制約と Wilkins（1988）の提案する意味役割に基づく制約との間の相互作用について論じている。

⁴ 前置詞句の中に現れる再帰代名詞の場合、束縛原理に違反しても適格な例や、代名詞と相補分布を成さない例が見られるが、それらの前置詞句が項かどうかに関して、異なった見解が存在する。

- (ii) a. We talked with Lucie_i about herself.
b. We talked with Lucie_i about her_i.

(Reinhart and Reuland 1993:715)

Reinhart and Reuland（1993）は、(ii) におけるような about PP を項ではないとし、代名詞も出現できるとしている。一方、Wilkins（1988）等は、about PP を項であるとしている。

⁵ Figure と ground という概念を用いるならば、再帰代名詞は指示物を figure とするとい

うことになる。(轟 1993)

⁶ 轟 (1993) は、Kuno (1987) で別々に設けられていた (11) (12) の制約を、figure という概念を用いて一つにまとめた統一的な制約を提案している。

参考文献

- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Chomsky, Noam (1986a) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (1986b) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*, Praeger, New York.
- Conan Doyle, Sir Arthur (1986) *Sherlock Holmes: the Complete Novels and Short Stories* Volume 1, Bantam, New York.
- Hintikka, Jaakko and Gabriel Sandu (1991) *On the Methodology of Linguistics*, Basil Blackwell, Oxford.
- Keenan, Edward (2002) “Explaining the Creation of Reflexive Pronouns in English,” Donka Minkova and Robert Stockwell (ed.), *Studies in the History of the English Language: A Millennial Perspective*, Mouton de Gruyter, Berlin/New York, 325-354.
- Kuno, Susumu (1987) *Functional Syntax*, The University of Chicago Press, Chicago.
- 中村捷、金子義明、菊地朗 (1989) 『生成文法の基礎——原理とパラ미터のアプローチ』研究社。
- Morison, Samuel Eliot (1965) *The Oxford History of the American People*, Vol. 1, Mentor, New York.
- Pollard, Carl and Ivan A. Sag (1992) “Anaphors in English and the Scope of Binding Theory,” *Linguistic Inquiry*, Volume 23, 261-305.
- Reinhart, Tanya and Eric Reuland (1993) “Reflexivity,” *Linguistic Inquiry* 24, 657-720.
- 轟 里香 (1993) 「再帰代名詞の分布に関する一考察」*Osaka Literary Review*, 第 32 号、92-101。
- 轟 里香 (1994) 「再帰代名詞に対する制約と項性」*Osaka Literary Review*, 第 33 号、17-28。
- 轟 里香 (1996) 「再帰代名詞と先行詞の構造的関係について」*Osaka Literary Review*, 第 35 号、36-48。
- Todoroki, Rika (1995) “Constraints on Reflexive Anaphora: Where Syntax and Semantics Meet,” *Osaka University Papers in English Linguistics*, Volume II, 125-151.
- Wilkins, Wendy (1988) “Thematic Structure and Reflexivization,” in Wendy Wilkins (ed.), *Syntax and Semantics* Volume 21, Academic Press, New York, 191-213.